

魔法騎士ルチエリールタ

【第5話】

みなぎし
すい

【人物一覧表】

ルチェリールタ（30）：ラフドナ騎士団長

クレーディー（29）：ルチェリールタの妹

チビィ：ルチェリールタの相棒魔族

シャーザベスラ：ヌノの皇女

ニユンリン：魔族

嵐宮芽里：夕杜王国の王女

嵐宮芽亜（44）：夕杜王国の女王

ニコポレルク（40）：プリマダンケ

騎士団長

ニコポレリン（38）：ニコポレルクの妹

ゲドーナ：ゲドン族首領

浮世心愛：神の子

ソガメーナ：魔族

レオナーナ：魔族

ナニダーナ：魔族

タクヤ（30）：神の子

岩田豪：（30）教師・アイドルプロ

デューサー

田中真佐紀（18）：神依学園生徒

イエスダスラ（32）：騎士

○夕杜王国・街道

嵐宮芽里、地面に降り立つ。

T「嵐宮芽里　夕杜王国、王女」

シャーザベスラ「芽里！」

芽里「久しぶり」

シャーザベスラと芽里、向き合う。

民衆「王女様？」

民衆「なんで王女様が？」

民衆、ざわざわし始める。

芽里「静まりなさい」

雷が落ちる。一同、びくつとして芽里に視線を向ける。

芽里「ニユンリンは改心すると言っています。つまり、もう皆さんに害はないということです。もういいでしょう、許してあげましょう。皆さんがやるべきことは命を奪うことではなく、皆で団結し生きていくことです……今の時代は500年前と違い、人間と魔族が共存する時代ですから」

芽里、冷静。

ニコポレルク（40）「ですが！ 失われた

ものは戻りません！」

芽里「そうです。しかし、先ほどの話では：

：ニュンリンは家族を失いどれだけ心が荒
もうとも、最後の一線は越えませんでした」

ニュンリン「う、うう……」

ニュンリン、ぼろぼろと涙を流す。

芽里「返せますか」

ニュンリン「え？」

芽里「奪ったものを返せるか、と聞いている
のです。例え全てでなくても返しなさい。
それをできなければ、これ以上は私にもど
うにもできません」

ニュンリン「っ……はい……」

目の前に糸と大きなツボが現れる。糸
が液体に変わり、ツボに入る。

ニュンリン「これを飲ませれば……奪ったエ

ネルギーなのでそのまま飲ませてください」

芽里「少し頂きます」

ニュンリン「え。なんで」

芽里「毒見です……はい、大丈夫なようです。

これを被害者のみなさんに配りましょう」

民衆、納得したような言葉を残しつつ

ぞろぞろとその場を去る。

ルチェリールタ一行、集合する。

芽里「行きましょう」

○ニコポレルク宅・寝室

ニュンリン、ニコポレリンに薬を飲ませる。

ニコポレリン（38）、ベッドで目覚める。

ニュンリン「ごめんなさい……もう2度としません……」

芽里「私からも保証いたします」

ニコポレリン「……王女様がそういうなら」

○宿屋・個室（夜）

ルチェリールタN「それから、ニュンリンはいろんなところを回って、奪ったものを返

した。わたしの治療もしてくれた」

ルチェリールタ、チビィ、シャーザベ

スラ、シャーニューニダ、ニュンリン、

芽里、宿屋へ。

芽里「ニュンリン。あなたがやったことはまだ奪ったものを返しただけ。償いの意思があるのなら、それを見せてください。ですが……ここまで1人でよく頑張りました、偉いですよ」

芽里、にこつとする。

ニュンリン「はい……！」

ニュンリンの表情から悲しみが消える。

ニュンリン「(弾んだ声で) ルチェリールタ

っ！」

と、ルチェリールタに抱きつく。

ルチェリールタ「わっ。なになに」

ニュンリン「ルチェリールタがいなかったら

どうなってたか！ だから、これからはル

チェリールタの旅についていくよ！ 助け

てくれて、ありがとうっ！」

ルチェリールタ「わ、わかったけど近い！

近いから！」

ニユンリン「えー」

ニユンリン 離れる。

○巨大飛行物体・監視室

ゲドン族、監視カメラを見ている。

ゲドン族A「おい！ これを見ろ！」

ゲドン族B「え？」

ゲドン族A「シャーニューニダがいないぞ！」

○同・司令室

司令室の扉が開き、ゲドン族AB入室。

ゲドン族A「シャーニューニダが裏切りまし

た！」

ゲドン族B「工場から姿を消しています！」

ゲドーナ「シャーニューニダ：あいつに続い

て裏切ったか！」

○宿屋・レストラン（朝）

シャーザベスラ「で、その……ルチェリール
タ。ニュンリンがずっとくつついてるけど
いいのかい？」

シャーザベスラ、2人をじつと見る。

ニュンリン「え？」

ルチェリールタ「あ、ああ。なんか恩人って
ことでもうなりました」

シャーニューニダ「邪魔なだけじゃないのか」
ニュンリン「は？」

ニュンリン、シャーニューニダを睨む。

シャーニューニダ「ベタベタくつついていて
は邪魔だ。いざという時動けないだろう。
防壁になろうにも、お前は力の大半を失っ
ている」

ニュンリン「はあ？ あーしとルチェリール
タは仲間なんですけど！ シャーニュー
ニダ、あんた仲間のくせにルチェリール
タ殺そうとしたでしょ！」

ニュンリンの言葉に、

シャーニューニダ「あの時のルチェリールタ

は明らかに敵だった。だから殺そうとした
までだ。演技だったようだがな」

シャーニューニダはずっとすました顔。

ニュンリン「こいつきらい。なんつかやな
感じしてむかつく」

ルチェリールタ、複雑な顔になる。

芽里「お二人とも、協調を大切になさってく
ださい」

ニュンリン「う……わかりました」

シャーニューニダ「はあ、やれやれ。素直に
聞いておいた方がよさそうだ」

洪々返事する2人。

○魔界・最深部

まがまがしい色の空。

そこにたたずむ巨大な機械仕掛けのロ

ーレ・レドニクス。

T「ローレ・レドニクス」

それが怪しい光を発する。

レドニクスの体の傷が癒されていく。

ソガメーナ「レドニクス様：待ってろ」

レオーナ「行くわよ」

ナニダーナ「やつらを殺しに」

○神依学園・正門（朝）

門番「芽里先生、おかえりなさいませ」

芽里「この人たちを通してください、私の客人です」

門番「はい、どうぞ」

○同・廊下（朝）

チビイ「すごい綺麗なところだな！」

チビイ、勢いよく飛び回っている。

シャーザベスラ「芽里。ここは無事なんだな。

ゲドン族に襲撃されなかったのか？」

芽里「私と心愛がいましたから」

会話していると、

女子生徒A「芽里先生！」

芽里に駆け寄ってくる女子生徒が1人。

女子生徒A「芽里先生と心愛さんが呼んでい

ます！ 帰ってきたらすぐ来てとのことでした」

芽里「わかりました」

○同・校長室（朝）

芽里たち、扉をあけて入室。

浮世心愛「おお、待っておったぞ」

心愛、仮面をかぶって壁によりかかっている。若く、妖艶な雰囲気を感じさせる。

T「浮世心愛 神の子」

嵐宮芽亜（44）「おかえり」

芽里「ただいま、お母様。心愛も、ただいま」

芽里の挨拶とともに、芽亜、椅子から立ち上がる。

芽亜「ルチェリールタさん。あなたのことは知ってるわ」

ルチェリールタ「ありがとうございます」

芽亜「さっそく本題だけど……あなたたち、旅をしているの？」

芽亜、生徒の成績を書き込みながら質問してくる。

ルチェリールタ「はい。わたしたちは」

旅の目的を話すルチェリールタたち。

ルチェリールタ「そちらの方は？」

心愛「わらわの名か？ そんなものはどうでもよい」

芽里「浮世心愛。私の友人で、神の子と呼ばれている人物です」

代わりに芽里が心愛を紹介。

芽亜「芽里。私はここで作業しているから、あそこに案内してさしあげて」

芽里「はい、お母様」

○同・廊下（朝）

ルチェリールタ「心愛さん、同行してくれるんですね」

心愛「予言の危機だからのう。わらわたちが立ち向かわなければならんのじゃ」

会話しながら歩いている。

芽里「心愛」

芽里、ペンを取り出し紙に何か書く。

心愛の肩をちよんと触る。

紙を見せる。

心愛「なんと、そうじゃったのか？　それは

丁重に扱わなければならんのう」

他には聞こえない声量で会話。

○同・ニソフカ教室

ルチェリールタたち、教室に入る。

3人の男が分厚い本を読んで何かをしている。

田中真佐紀（18）「先生」

岩田豪（30）「芽里先生、おかえりなさい」

タクヤ（30）「おかえりなさい」

3人、芽里に挨拶。

ルチェリールタ「え：なんであなたがここに」

ルチェリールタ、驚いたような顔になる。

ルチェリールタ「岩田豪さん……？ 岩田豪

さんですよ！？」

豪「はい。そうです」

豪、メガネをくいっとする。

チビイ「誰だ？」

ルチェリールタ「人気アイドル、カズミのプ

ロデューサーだよ！」

チビイ「いや誰だよ！」

ルチェリールタ「最近忙しいから推し活でき
てなかったんだけどね、めっちゃかわいい

アイドルなの！ もうめっちゃ！」

ルチェリールタ、興奮している。

○（回想）ライブ会場・客席

カズミ「みんなー！」

観客「わあああああ！」

カズミ、観客に向かって手を振る。

ルチェリールタ「いいよー！ カズミちゃー
ん！」

（回想終わり）

○神依学園・ニソフカ教室（朝）

ルチェリールタ「めっちゃかわいくて……」

チビイ「いやなんかわかんない話は今いいから！　なんかこの人たちが重要な話があるんだろ！？」

ルチェリールタ「あ、ああそうだった。ごめんごめん」

ルチェリールタ、表情を引き締める。

ルチェリールタ「それで、この人たちは？」

芽里「順に、田中真佐紀さん、岩田豪さん、タクヤさん。田中さんはこの学校でいちばん成績のいい生徒。岩田さんはこの学校で教師をしています。タクヤさんは神の子です」

ルチェリールタ「神の子……」

芽里「神の子といっても、本当に神の血縁者という意味ではありません。神に血縁者という表現が適切かはわかりませんが……この人たちがやっているのは、500年間現

れていない神と交信を試みています。神と近しい存在、特殊な力を持った人が神の子と呼ばれています。そして、500年前の英雄が残した言葉をもとに、巨悪に対抗する救世主を探していました」

チビイ「いや長すぎてわかんねえぞ！」

ニュンリン「あーしも……無理……」

チビイとニュンリン、理解がおいついていない。

芽里「要するに、世界を救う……その救世主が現れたということです」

芽里の言葉に一同、大小様々に驚く。

ルチェリールタ「それって？」

芽里「……」

少しの間。

芽里、手で指し示す。

芽里「あなたです、ルチェリールタさん」

ルチェリールタ「……わたし？」

芽里「はい」

チビイ「……えええええ！？こいつそんなす

ごいやつだったのか？ 平民生まれなのに？」

芽里「平民かどうかはさほど重要ではありません」

チビイ「まだ難しくてよくわかってないんだけど」

芽里「本当に重要な話なので、聞いておいてください。あとで要約してあげます」

ルチェリールタ、固唾をのむ。

芽里「500年前の英雄、双子の片割れイエフリスト。彼が残した言葉……彼は現代に現れ、時が来たら救世主に協力する……と」

チビイ「それがルチェリールタなのか？」

チビイ、ルチェリールタの方にぴつとくつつく。

芽里「はい。要するに、この3人が予言の英雄と救世主を探していたということ」

ルチェリールタ「その人がなんらかの方法で現代に来たとしても、その人とは現代で会った覚えがないですね……わたしが見つ

ったのはたまたまですか？」

芽里「うーん……多分はい」

ルチェリールタM「なんか歯切れの悪い言い方だなあ」

チビイ「あれ、こいつ英雄だっけ？」

と、ルチェリールタの頭に乗る。

ルチェリールタ「違うよ。神に認められてないもん」

○宿屋・個室（夜）

ルチェリールタN「それから、わたしたちは次の目的地に向かって進んだ。別の宿屋で部屋をとった。心愛さんも旅に同行することになったため、一緒の部屋だ」

就寝。

○（回想）遺跡・屋外

ニユンリン、巨人の髪の毛から逃げている。

ニユンリン「いやああああ！ 助けて！」

イエヌダスラ「はあっ！」

ニユンリン「！？」

イエヌダスラと騎士たち、ニユンリンに迫る髪の毛を切り落とす。

イエヌダスラ「収まった。気配が消えた……

俺はイエヌダスラ。大丈夫か」

ニユンリン「な、なんで魔族を助け……人間と魔族は……ああああ！ 殺される！」

ニユンリン、恐怖で錯乱している。

イエヌダスラ「俺は別に、邪悪でなければ魔族と争う必要はないと思ってるだけだ。兄と違ってな」

ニユンリン「兄……？」

ニユンリン、錯乱が解ける。

イエヌダスラ「イエフリスト、英雄だ。知らないか」

ニユンリン「知らないっ。ていうか……」

イエヌダスラ「なんだ？」

ニユンリンM「この人なら助けてくれるかも

……」

ニユンリン、胸をなでおろす。

イエヌダスラ「おまえ、後世に伝えてくれないか」

ニユンリン「何を」

イエヌダスラ「これは調べたことなんだが。

ポストゼランガロニア国王の正体は邪悪な魔族だ。最高神をも殺す兵器を作り出して、世界を破壊しようとしている。狂気だ」

ニユンリン「神を殺すって、魔族なんかそんなことできるわけ……」

イエヌダスラ「できるんだ。奴なら！ ……

っ！ 危ない！ ぐあっ！」

一瞬のできごと。

イエヌダスラ、髪の毛に刺される。

イエヌダスラ「し、しまった……がはっ。気

配……俺も騎士としてまだまだって、ことか……ごめ……兄、さん……」

ニユンリン「あ、あ……」

助けを求めているニユンリンの顔が恐怖でゆがむ。

ニユンリン「あああああああああああああ」

○宿屋・個室（朝）

ニユンリン「あああああああああ！」

ニユンリン、飛び起きる。

ルチェリールタ「わ。どうしたの。みんな起きてるよ？」

ニユンリン、目から涙が流れている。

○同・食事処

一行、朝食を食べている。

ニユンリン「思い出しました……」

ルチェリールタ「何を？」

ニユンリン「あのね、ルチェリールタに離れた過去はあれで全部じゃなかったの……あーし、イエヌダスラっていう騎士に助けられた」

芽里「イエヌダスラ？　なぜその名が？」

芽里、身を乗り出して反応。

ニユンリン「イエヌダスラ、兄がイエフリス

トだって言ってた……イエヌダスラはあーしをかばって死んだ……トラウマで、忘れてた」

それから、思い出したことを全部話す

ニユンリン。

ルチェリールタ「今のまじ？」

ニユンリン「うん。イエフリストの言葉って、

これに関係してるんじゃない？」

ルチェリールタ「その話が本当だとしたら、

絶対そうだよね……超やばいじゃん」

芽里「私とシャーザベスラは王女で国のトップというわけではありませんから、首脳会談には参加していません」

シャーザベスラ「そうだね。だから他国の王は直接見ないとわからないわけだ」

チビィ「あれ、でもお前たちみたいに王の子供が知り合いなら、王のことくらい知ってるんじゃないのか？」

芽里「そうとも限りません。子供だけで交友関係があることだってありますよ」

チビィ「それもそうか」

○夕杜王国・住宅街（朝）

人々の声がする、活気のある街。

芽里「国王が世界を滅ぼす邪悪な魔族だったとなれば一大事です。クレーディーもシャーニューニダのお兄さんも、探すのを少しだけ我慢していただけますか」

ルチェリールタ「少しかは置いといて、世界の危機と妹、比べるまでもありません、世界を守りますよ。まあなんか妹強くなつてたし大丈夫でしょ」

シャーニューニダ「我は兄に逢えればそれでいい。だから先に面倒ごとは片づけてしまえ」

芽里「ありがとうございます。では、ポストゼランガロニアへ向かいましょう」

芽里たち、港へ向かう。

シャーザベスラ「……」

芽里「？」

シャーザベスラ「……あ、ああ、あああああ

あああ」

芽里「何を……まさか！」

2人の間に流れる、張り詰めた空気。

2人、違う方向を向く。

シャーザベスラ「みんな！ 逃げろ！ ここから離れろーッ！」

と、人々に向かって叫ぶ。ざわざわする人たち。

一行の前に勢いよく降ってくる何か。

爆音を立てる。

煙があがり、ソガメーナ、レオニーナ、ナニダーナが姿を表す。

シャーザベスラ「何してる！ 早く全員逃げるんだ！」

3体の魔族を見て逃げる人々。

シャーザベスラ「来たか……レドニクスの手先！」